

## どんでんぐりで子どもたちの子どもたちによる森作り

NPO法人どんでんぐりモンゴリ理事長  
角和保明

### 田舎にあこがれた日々

昭和21年秋に旧満州国新京市から引き揚げて来た。

親父の実家は横浜市鶴見区、お袋の実家は東京都江東区深川にあったので田舎が無かった。夏休み、冬休みに田舎へ行っていた友達が帰って来るといつも沢山の栗、葡萄、林檎、蜜柑、お餅、魚、野菜、金山寺味噌をもって来る。洋服も田舎から帰って来た友達のものとはなんとなく新しい良いものに見えた。都会に住み田舎の無い自分には田舎が不思議でたまらなく行ってみたいと思ったことが度々あったから、おかしな時代であった。

海の話、川遊びの話、山の話はどれもこれも新鮮で楽しそうな夢みたいな話ばかりで、益々田舎が恋しいというより欲しくなった。当時の横浜ではまだまだ沢山あった近くの森、池、川で遊んだ日々であったが、どうも友達から聞いた田舎の話とは違っていた。食糧難の時代で配給の芋、かぼちゃ、メリケン粉でお袋が作ってくれた水団が一番美味しいと思っていたが、社会人になり給料を貰い、林檎、桃、天津甘栗、バターピー、干し柿、お惚気豆をいつも食べている夢を見ることもあった。

### 我がどんでんぐり人生に悔いはなし

日本の田舎、山、川、海、島々へ行ける仕事が、建設機械メーカー入社したことで自分の夢がぴったりと合い、大変ラッキーであった。

36年間の会社生活、東京本社をスタートして茨城県の工場、東京本社、名古屋支店、浜松支店、岐阜支店、中部支社、中国四国支社、東京本社、中国(CHINA)会社、岐阜の系列会社、最後は東京本社勤務。海外出張でアメリカ、カナダ、ドイツ、イタリア、スウェーデン、シンガポール、タイ、ベトナム、メキシコを周った。

ビジネスの世界では出来ない、すぐに結果の出せないどんでんぐりでの環境啓発を追いかけるために、退社の決意の時を迎えた。

『老兵は語らず静かに去るべし。姥桜は最高の色、香りをつけてメジロを呼び、実をむく鳥に運んでもらう』が皆さんへのお礼の言葉だった。

このサラリーマン時代に長野、岐阜、旭川、福島、山形、福井、新潟のロックフィルダム、浜岡、柏崎、敦賀の原発現場。長崎、能登、静岡、鹿児島、中部の空港現場。恵那山、山崎、東京湾横断アクアライン、名古屋、東京の地下鉄トンネル現場、ゴルフ場、スキー場、高速道路、大阪万博公園、宅地造成、林道、埋め立て、海岸でのテトラ敷設現場。三州瓦、瀬戸窯業原料、砕石、

石切、石灰採取場と日本国内の全ての県へ行き、数多くの人から地域情報、知恵を聞くことができ、田舎へ憧れた夢を満足の限り味わえることができた。一方では、田舎の美しい山、川、海が消えて、若い人がいなくなる淋しさも数多く目の当たりになって来た。

### 【森が消えれば海が死ぬ】を学ぶ

中国四国支社の広島時代、秋の日差しがきらきらと輝く穏やかな海、宮島、牡蠣棚を眺め今年も美味しい生牡蠣、牡蠣フライ、牡蠣飯を食べる喜びを感じていた時に、一人の女性スタッフが「今年の牡蠣は夏の長雨と赤潮で大量に死んでしまい。貝毒が発生し牡蠣の出荷できないのです」と教えてくれた。その数日後に広島市内を流れる太田川の源流の中国山脈の芸北町をマウンテンバイクで走っていると、山の急斜面で大漁旗を掲げ、多くの人が植林をしていた。「ゴルフ場、スキー場、林道、牧場が沢山できてブナの木、ドングリの木を切ってしまったので海の魚は減り、牡蠣も育たなくなったからドングリを植えている」と真っ黒に日焼けした漁民の一人が教えてくれた。近くの山にはザリガニ、サソリのような自社の機械が沢山動いていた。建設機械ではなく自然破壊機械とも思えるようになり、「このままではあの世で閻魔さんに捕まるぞ」とどングりの植林を始めることとなった。

水源地の子ども、おじいちゃんが拾い送ってくれた沢山のどングりを、ザリガニのような機械で耕して会社の敷地に大きな畑を作り、どングり苗を育て始めた。

香川県の採石場跡地へのドングリ銀行の植林。神戸の阪神大震災後の学校、公園へどングり植林のグリーン銀行の活動。鳥取県のトトリネット（ハングル語でどングりはトトリの意）ドングリクッキー、そばとどングりを飼料として与えてたトトリコ豚の開発。長野県大滝村でのどングり植林とドングリコーヒーとの出会いが、どングりと日本人、食料、水、海との関係、動物、昆虫と生存競争、どングりの奥の深さを勉強する機会となった。

### すばらしき人たちとの出会い

中国へ仕事で渡った時も、禿山、水のない川、沙漠、三峡ダム、高速道路現場、どこへ行っても建設機械の姿は多く見られたが、日本の落葉広葉樹系のどングりの古里でどングリの木を探すことは難しく、小鳥の鳴き声も昆虫の姿も少ないことがたいへん気になった。そこで、仕事以外での捲土重来を期した。

帰国後の仕事はそこそこに「森は海の恋人」の北海道大学教授（当時）の松永勝彦さん、岐阜県清見のどングりの会の稲本正さん、宮城県の牡蠣養殖の畠山重篤さん、長野八ヶ岳のニッカウキスキーのCMでおなじみのニコルスさんの植林活動、講演会、講座へ数多く顔を出して、どングりの不思議、パワーの勉強が始まった。茨城県立農業大学で苗木づくり、東京大学、岐阜大学、信州大学の演習林で植物、動物連鎖、植生を沢山教えていただいた。元茨城県園芸部長の檜山博己先生からは国内、内モンゴルの沙漠の現場で徒長枝の選定技術と栗苗の根切りによる育苗技術を指導いただき、

後々の沙漠植林、どんぐりウォーカーの子どもたちとのポット苗、牛乳パック苗づくりの開発への大きな勉強となった。感謝。

## NPO 法人「どんぐりモンゴリ」の設立

今、地球も経済も金融も大きなピンチを迎えた。これからはもっと大きな水、食料、エネルギーの大危機がそこまでやって来ている。2、3年後で結果を出さなくてはいけないビジネスでなく、結果が出るのがズーッと先でも良いのが NPO 法人の仕事かもしれない。

水源地の森づくり、モリコロパークのモンゴリナラの森づくり、沙漠のモンゴリの空中牧場計画は、植えたどんぐりの実がなつて、実の幼樹が育つて始めて完成です。



内モンゴルの沙漠

## 子どもたちが主役のどんぐりの森作り

子ども達が大好きなどんぐりの実を拾い、家庭で、学校で育てたポット苗を水源地の山、里山に植えに行くことによって、森林の再生や水源の涵養を行う。植林地も高齢

化で放置された山林、原野、畑、水田地を主体として地元の老人の知恵を勉強しながら実践する。いずれも水源地の住民と水の恩恵を受けている下流地域の子もたちを中心とした活動とし、自然環境の改善を学ぶとともにその重要性を指導、啓発する。

今、都会の子ども達は、どんぐりの「虫が出てきて怖い」「公園、道路に落ちていて汚い」「食べられるの?」というイメージから、「美味しい水、栄養豊かな水を作る」「切り倒しても又、株から生えてくる」「動物、昆虫の大切な食べ物」「大雨で山崩れを防ぐ」「椎茸の原木、炭として使う」「貝、海老、蛸、魚が増える」「マイカーボンオフセットができる」など、どんぐり授業でどんぐりの不思議、パワーを学び、多くのどんぐりウォーカー（預かり、育てる、植林する）が誕生しています。苗木を各家庭で一年間育ててもらい、その苗木で水源地の森づくりです。

自分の手で育てたどんぐりだからこそ、その成長を楽しみに見守りたいと思うのではないのでしょうか。やがて子どもたちが大人になって、自分の子供を連れて行く頃にどんぐりの実が成り森の完成です。

昔から山を大切にしてきた日本人、古老が守ってきた地域の銘木、古木もたくさんあります。子どもたちが地元で古老から学び、苗木づくり、植林を通して持続性のある緑化活動を目指して行く事も大切だと思います。

「森は海の恋人」「森が消えれば海も死ぬ」。森と川と海がひとつになった生態系環境意識、カーボンオフセットを皆で実践できる楽しみを作っていきます。

## 百年先の森作りとどんぐりウォーカー 三つの約束

どんぐりの不思議、パワーを学ぶ。  
どんぐりを自分たちで拾い、育てる。  
どんぐりで水源地の森作りをする。

### 内モンゴルホルチン沙漠の空中牧場計画

近年日本へ飛来する Nox 系の有害汚染物質が付着した黄砂と酸性雨が、山、樹木へ与える悪影響が気になりだした。会社籍中の1999年に黄砂の発生現地であるゴビ沙漠緑化調査隊へ参加し、沙漠化の恐ろしさ、厳しさを実感して人為的な草原環境破壊による黄砂の発生が「隣国の出来事として臭いものに蓋をするのではなく、元から絶たないとだめ」と考え37年間の会社生活にピリオドをうち、ライフワークとしてのどんぐりによる緑化啓発活動を開始することにした。日本から一番近い沙漠、中国内モンゴルのホルチン沙漠では貧困家庭の子どもを里子として学校へ通わせ、子どもたちとモンゴリ(蒙古櫟)の苗木作り、植林活動、日本語教室での緑化啓發行っています。蒙古櫟、五角楓、四倍体アカシア、野榆等の落葉樹の森を創り、実は豚、枝葉は牛、馬、下草は羊、山羊の餌にと立体的に使う空中牧場づくり、沙漠地にビニールを敷設し、豚、牛、馬、山羊の糞を使った無農薬、不耕起栽培による米作りにも挑戦しています。地元のけん

きゅう熱心な牧農家は一目朋友(日本米の一目ぼれ)の収穫量を日本の2倍近く上げるようになりました。モンゴリ(蒙古櫟)が大きく育った時には枝葉を水田に足で埋め込み発酵させ、春先の水温管理と養分作りを考えている。

### 内モンゴル沙漠スタディツアー

どんぐりモンゴリの名誉顧問 日本人残留孤児の烏雲(日本名立花珠美さん)の「中国人の温かい、優しい心への恩返し」で始めた貧困農民の子供たちの教育、沙漠植林の愛の活動を永く繋いで行く活動を「どんぐりモンゴリ」が行っています。毎年4月と7月には、「内モンゴル沙漠植林スタディツアー」で、見て、聞いての体験と烏雲先生との出会い、モンゴリ苗作り、植林を日本人サポーターとともに汗と涙を実体験する感動ツアーです。

大砂丘地での満点の星空、真っ赤に沈む夕焼け、馬車のたび、牧農家での植林と食事、子供たちとの日本語教室を満喫します。



内モンゴル自治区での植林



植林によって、みごとな森が育っている。

## ■著者プロフィール

角和保明 (KAKUWA Yasuyuki) NPO法人「どんぐりモンゴリ」理事長

1944年旧満州国新京市生まれ。父は電気技師として旧満州国へ渡り母との間に4人の男子を出産し、1946年11月、一家全員無事に日本へ引き揚げた。1966年建設機械メーカー入社。国内支店長、支社長、中国会社副総経理、上海会社董事長、国内関連会社社長等を経験中に、建設機械稼働現場でのどんぐり

の不思議、「山は海の恋人」、中国内モンゴルからの黄沙と日本での影響、子どもたちが出来るどんぐり苗木作りを学ぶ。1999年9月から中国内モンゴル沙漠植林活動参加、2000年ゴビの沙漠緑化調査隊に参加。

2001年3月早期退社、国内でどんぐり苗木作り、植林活動と幼稚園、学校、

団体で授業、講演会活動開始。2001年7月から内モンゴル、ホルチン沙漠で沙漠化貧困家庭の子ども達への学資金支援、蒙古櫟（モンゴリ）作り、日本語教育活動を始める。

2005年12月若手後継者、資金作り、市民参加者確保のためにNPO法人どんぐりモンゴリを設立。2006年愛銀教育文化財団助成金授与、年間を通しての植林、牛乳パック苗の開発を行なう。2007年愛・地球博記念公園（モリコロパーク）で、子ども達とどんぐりの森作り、モンゴリ森守プロジェクト企画運営が最優秀で採用された。2007年11月「100年先の森の為に、水の為に子ども達と」事業へ日野自動車グリーンファンド助成金授与。2008年から「あいちモリコロ基金」助成金を受け、子供たち主体のモンゴリの森林再生による沙漠の緑化事業へ進行中。「日本のどんぐり沙漠のモンゴリ」授業、講演会を幼稚園、小学校、子供会、大学、市民団体、イベントでの啓発活動を年間40回以上企画し2000名以上のどんぐりウォーカー（預かり、育てる人）が参加。知県北設楽郡東栄町100年先の森作り（トヨタ自動車環境活動助成プログラム、大成建設自然、歴史環境基金）などを進めています。

注：角和氏も、2009年3月22日に発足した「愛・地球博記念公園（モリコロパーク）公園マネジメント会議」のメンバーで、2007年12月に設立された準備会から携わっている。



内モンゴル植林ツアーで（左端）

## 大地の子 日中の架け橋

多文化共生研究所・NPO法人どんぐり「モンゴリ」主催  
「県大ファンファーレ」企画 2008年11月4日（愛知県立大学講堂）

烏雲（中国名）：立花珠美（日本名）

このたび、NPO 法人どんぐりモンゴリのお招きで、再び祖国に帰って来まして、古くからの友人、そして新しい友人とお会いすることができ、とても感激しています。

私は中国残留孤児です、モンゴル語の名前は烏雲（ウユン）、日本の名前は立花珠美。1938年徳島に生まれました。1940年、2才半の時、両親と共に中国の東北部に渡りました、その当時は王爺廟（現在の内モンゴルウランホト市）に住んでいました。1945年ソ連が中国東北部に派兵し、日本は降伏し、敗戦しました。当時、王爺廟にはまだ引き上げていない日本人が大勢いました、鉄道の橋が爆撃を受け、交通手段が閉ざされました。人々は集まって、徒歩で東南方向にて撤退しました。王爺廟から30キロの葛根廟付近を歩いている時、ソ連軍の航空機、戦車の爆撃で追跡され、逃げ道がなくなりまして、集団自決しました、私の母、姉、二人の弟、一人の妹はこの時亡くなりました。私は運良く、命は助かりました。心のやさしい中国人に引き取られました。中国の養父母は実の親よりもやさしくしてくださいました。生活の厳しい時代にも関わらず、私は学校に行かせてもらいました。家庭の経済事情は大変貧乏の中、大学を卒業するまで、学校に行かせてもらいました。政府から、中学と高校、大学は奨学金もらいました。私は人々に尊敬される人民教師を目指しました。

文化大革命の時、養父母は日本の孤児を

引き取ったことで、日本のスパイとされ、大変ひどい目に遭いました。しかしそんなときでさえ、養父母は一貫して言ったのが、「戦争を起こしたのは日本の軍国主義者達で、日本の子供達には罪がない。だから、養女を引き取ったのは何の罪もない」とうことです。あの特殊の時代において、養父母は精神的にも肉体的にも大変な苦勞を耐えながら、私を愛し続けてくれました。

幼少からの私の最大な願望は、自分を生んでくれた祖国を一目見みたいといことでした。自分の家族に会えたらどんなに幸せかと秘かに心の中で思っていました。しかし、当時の日中両国は敵対関係で国交はありませんでした、私の願望もそのため数十年実現できませんでした。

1972年、中国と日本の国交は正常化しました、私は心よりこれを喜び、同時に私の夢の実現に現実味も見えてきました。心のやさしい方の助けによって、1980年に私の家族の消息が分かりました。1981年8月私はついに40年も離れていた祖国の地四国徳島市に着きまして、兄、親戚と再会しました、当時のことを振り返ると夢のようでした。戦争は中国、日本の両国の人々に多大な災難をもたらし、無数の家族がバラバラにされ、無数の命が落とされました。私は生き延び、今日まで健康で生きていられるのは、すべて善良な中国の養父母と中国人民の御陰です。ですから、1981年私が日本に帰国した時、兄夫婦

と友人達から日本に永住するように説得されましたが、内心は矛盾で悩みました。片方には私を生んでくれた故郷と家族、片方には私を育ててくれた土地と恩のある養父母がいます。いろいろ悩んだ末、私は中国に帰ることに決めました。自分の想いと愛で中国の人民に恩返ししたいと思い、それを実行してきました。

30年間教育現場で仕事をしてきましたが、私は仕事を愛し、自分のすべてを草原人民の子供達に捧げました。私の小さな貢献に対して、中国の人民が私に多大な名誉をくださいました。私は国、内モンゴル自治区における女性の最高名誉である〈全国三八紅旗手〉、〈全国教育分野労働模範〉などの名誉を頂きました。政府からも非常に高い地位を頂きました、私は第8回、第9回全国政治協商会議委員に推薦されました（1993から2002年）、通遼市政治協商会議副主席、通遼市人民代表大會常務委員会副主任も歴任し、2004年定年になりました。現在は庫倫一中（蒙古民族高校）の名誉校長を務めています。

私は内モンゴル自治区の通遼市に住んでいます。内モンゴルは中国の省のひとつです。私が住んでいるのが、内モンゴルの12の盟（市）のひとつで、遼寧省、吉林省と接します。総面積6万平方キロ、人口は310万人、そのうちモンゴル族の人口は自治区モンゴル族総人口の3分の1を占めています。

通遼市は中国四大沙漠のひとつ、ホルチン沙漠の中腹部に位置します。沙漠の総面積は518万ヘクタールです。全国でも、沙漠化のひどい地域に数えます。苛酷な自然環境にさらに自然災害が頻発し、地域経済の発展と地元農牧民の生活の改善に悪影響を与え続けてきました。と同時に、周辺

地域と隣国の環境にも影響を与えるようになりました。歴史上、ホルチン草原はかつて美しい疎林草原でした、しかし、人口の増加、過放牧、環境に関しての意識不足、遅れた生産経営活動などの原因で沙漠化しました。こうした人的な原因以外にも早魘、風など自然的原因も沙漠化の要因にあげられます。

地元の人々は沙漠と戦ってきました、植林を始め、禁牧、畑を草原へ変えるなど政策を取りながら、法律の整備、資金の投入もしてきました。近年、農牧民の環境意識も高まってきました、少しずつ、緑が帰ってきました。最近の統計を見ると、森林面積は戦後の2.7%から現在の23%までに回復しました。中国の観測データによりますと、中国の四大沙漠の中、ホルチン沙漠が一番緑化率が多くて、緑化速度が沙漠化速度を上回った逆転現象が起きました。

この成績の背後に、日本の民間団体と日本の友人達からの多大なご支援とご協力があります。1994年から菊地豊先生を代表とした日本の沙漠植林ボランティア協会が初めてホルチン沙漠で植林活動を開始しました。それ以来、どんぐりモンゴリなど数多くの日本のボランティア団体が植林活動で活躍し、沙漠緑化に大きな貢献をしました。

日本の植林ボランティア団体の支援と協力によって、徐々に緑が回復し、沙漠の中にオアシスも増えてきました。烏雲の森、阿弥陀の森はもうすでに本当の意味で森になりまして、いまや美しい景色の代表にもなりました。生態系の回復によって、野生動物と野鳥も増えました。食糧、草の生産量も著しく増加し、農牧民の収入も大幅に増えて、生活も改善しました。

沙漠の緑化活動と同時に、貧困地域の教



育にも多大な関心とご支援を頂きました。この数年、民間団体、あるいは個人の援助によって、貧困地域で学校を建設し、教育設備を充実し、さらに貧困学生の為に、“ウユン奨学基金”、“どんぐりモンゴリ奨学基金”などが設立され、のべ300名の貧困学生が奨学金の援助を受けながら、学業を完成させました。

日本の植林協力隊の皆さんは、厳しい自然環境に負けず、春は砂嵐と戦って、夏は炎天下、秋は寒気の中、様々な困難を乗り越えて来ました。彼らのなかには90才、80才の高齢の方もいれば、10才未満の小学生もいます、彼らの一生懸命奉仕する精神が地元の人々に感動されました。彼らは広く地元の農牧民と交流を深めてきました。“日本人なのに、どうして自分のお金を使ってまで、私たちのために緑化に協力するのですか”と聞かれた時、日本人は“私たちはみんな地球人ですから、地球の環境が破壊されて、地球上のすべての人間がそれを復元させる義務があります、後世の為に美しい地球を残したい”との答えは地元の人々にたちまち尊敬されました。国境を越えて、この精神は人々を感動させます。毎年、日本から、小学生、中学生、大学生達が植林活動に参加して、この活動を通じて中国を理解し、中国の生活体験もできて、彼らは中国の子供達と一緒に植林し、一緒に歌を歌い、ともに遊び、お互いに語学を勉強し、とても仲が良いです。この光景を見る度に、私は心から喜びます。彼らから21世紀の中日友好の希望が見えてきます。

ここで、特にNPO法人どんぐりモンゴリの皆様さんが、長年、ホルチン沙漠の緑化事業に尽力して来たことを讃えたいと思います。子供たちと苗木を作り、植林実験

など各段階で一所懸命頑張って、多大な努力を惜しまずにやって来ました。

さらに尊敬すべきことに、貧困家庭の学生に学資を出して、現在13名の貧困学生がどんぐりモンゴリ奨学金の支援を受けています。この子達は、高校まで、学費の心配なく勉強が出来るようになりました。学校以外の時間を利用し、烏雲農場に来て苗木づくりを行って、技術を習得したり、日本語の勉強をしたりしています。この子達はみんな成績優秀です。最初にこの奨学金を受けた子供達はすでに高校を卒業し、希望した大学に進学しました。

角和さんはこの事業のため、日本で勤めていた会社を早期退職して、沙漠地へ来て、日本と中国の間を毎年何度も往復して、ご自分の全てをこの活動に捧げてきました。彼らを愛し、勉強の時は厳しい先生であり、貧困学生にとっては、優しいお父さんのような存在でした。貧困家庭が、子供の教育費を払えるようになる為に、沙漠地をブルドーザーで開墾してビニールの水田を作り、トウモロコシ栽培から米、野菜生産に転換するなど、様々な収入増加策を考案し、それに関わる資金援助して来ました。

私は沙漠の人民を代表して、各界の友人達が中日友好、沙漠緑化事業、環境の改善事業、及び教育へと資金援助して来たことに、最高の敬意と心よりの感謝を表したいと思います。

私は中国残留孤児ですが、中日両国の人民の愛を受けましたこと、日本の同胞が支えと激励をくださいましたこともすべて私の心の中に永遠に刻印され、今後、今以上に努力し、両国の人民の期待に答えられるように、あなた方とともに、両国の友好に力を緩めず、頑張って行きたいと思います。

## ■講演者プロフィール

中国名：烏雲（Uyun）、日本名：立花珠美（TACHIBANA Tamami）

昭和13年に、立花正市、シヅコの二女として徳島市で出生。2歳半の時、兄（甫）を残して、家族5人が旧満州興安南省王爺廟に移住。昭和20年、父（官吏）が通遼市に出張中にソ連軍の侵攻を受け、葛根廟付近で戦車隊に襲われ、珠美さんを残して家族全員が死亡。この時の犠牲者は1500名。当時7歳の珠美さんは中国人の張さんに助けられた。翌年に、モンゴル族の養父アルタンオチルと漢族の王秀廷に引き取られ、ウユンと名づけられる。

極貧の中、養父母に教育を受けさせてもらい、優秀生として奨学金を受け、内蒙古師範大学を卒業、教師となる。同僚教師と結婚後、2人の子どもをもうける。

文革中は、養父母が日本人を育てた「スパイ」と糾弾されたが、ウユンの居所を隠し、勤務先の同僚教師も生徒も庇い通した。

日中国交回復後、肉親探しを始め、徳島の兄が判明。1981年、一時帰国し、兄と再会。永住帰国を勧められたが、養母と中国に恩返しをする為、中国へ還り、教育に献身した。1990年、全国教育者模範賞を受賞。1991年、内モンゴル自治区政治協商会議常務委員に選出。

1992年、日中国交20周年記念番組として、彼女の半生を描いた中日合作テレビドラマ「大草原に還る日」が日中両国で放映され、



植林に携わる烏雲さん（右から2人目）



烏雲さんの半生について書かれた『烏雲物語』（原田一美著、2001年、徳島県教育印刷）発行

大きな感動を呼んだ。1993年、中国人民協商会議全国委員会第8回全国委員に選出。1994年、庫倫旗第一中学校を定年退職。沙漠植林ボランティア協会の協力で、内モンゴルホルチン沙漠において「烏雲の森」の植林活動を開始。現在、通遼市海外交流会名誉会長、通遼市女性企業家協会名誉会長、庫倫旗第一中学校名誉校長などを務める傍ら、植林、貧困家庭の教育支援などを続けている。